



林 真理子

ミカドの淑女

おんな

新潮社

ミカドの淑女^{おんな}

著者 林真理子^{はやし まりこ}

発行 一九九〇年九月二五日

一刷 一九九一年三月一〇日

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一 一六二

電話〇三三三六六五一一(業務)・〇三三三六六五四二(編集)

振替東京四一八〇八

印刷所 株式会社光邦

製本所 加藤製本株式会社

価格は函に表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。



ミカドの
淑女おんな

装
幀
装
画
金
子
國
義

明治四十年二月二十三日

夜明け少し前に、帝はお目覚めになった。

このところ、深くお眠りになることは少ない。側近の者は誰でも言うことだが、二年前の白露戦争のご苦労は、帝のからだに深く刻まれていた。あれほどお好きだった乗馬もあまりなさらず、静かに蓄音機を聞かれることが多い。なさることに、大儀なご様子が多く見られるのだ。

火の気の無い御寝所の空気は暗く冷たく、帝はつきりと目を覚まされた。十五畳ほどの日本間である。大きな寝台の他はこれといったものもない。内裏はあらゆるところ、闇と寒さが野放図に横たわっている。帝がお寝みになるところも例外ではなかった。

これからご起床になるまでの長さを思うと、帝は大層憂鬱になられる。けれどもどうすることもできない。内裏の朝というのは、帝がお目覚めになる六時と決められているのだ。すべての女官の歯車が、その時から動き出す。お髪をとかす女、洗面のお湯を運ぶ女、そしてその女に仕え

る大勢の婢たちが、一分も狂いのないよう心を碎いている。

そしてそういう仕組みをつくったのは、厳格な御気性で知られる帝御自身なのだ。

女たちのために帝はゆつくりと目を閉じられる。耐えがたいほどの寒さを、夢の中に塗り込めるためもあった。

その時だ。帝は女のしわぶきを聞いた。あたりをはばかりやかなひそやかな音だったが、帝の耳ははっきりとそれをとらえた。園祥子そのさちこ権典侍ごんのすけだった。皇太子をおあげになった柳原愛子なをこ典侍は別格として、帝には現在権典侍という名の三人の愛妾がいらつしやる。けれども御寝台の近くに侍って宿直するのは、最近では小倉文子か園祥子に限られていた。

今夜の当番である祥子は、こらえきれぬようにもう一度咳をする。

この女も年とつたものだ、帝は祥子の顔をゆつくりと思いうかべられた。たつぷりとした黒髪と、やや皮肉そうな唇を持ったこの女官を、若い頃は大層可愛がられたものだ。今のようになだ傍で休むのではなく、祥子は毎夜のように御寝台の上にあがった。御寵愛が深かった証に、祥子は次々と八人の御子を生んだほどである。

特に明治二十年の猷仁親王みちひと御誕生の時は、やつとお育ちになりそうだと宮廷中が喜んだものだ。けれども翌年には、あつけなくお亡くなりになった。その後も御運は悪くて、明治十九年の静子内親王を含めると、四人の御子を失くされたことになる。うまく育てば皇子の御生母さまと呼ばれた祥子のことを、帝はふと憐れにおぼしめした。

やがて若い日の祥子を思い描く瞼の裏側に、ほんのりと白味が漂ってきた。どうやら夜明けが

近づいてゐるらしい。宮中の奥深くにも朝の陽は射してくる。

もう少し眠らねばならない、と帝はご自分に言いかけせる。そのために下々の者もするようなことをなさろうとした。記憶の中から、楽し気な、そして深く考えずにすむようなことを抽出されようとしたのだ。

幼ない頃すごした京都御所のありさまを、帝はお選びになる。お髪を稚児髷にし、縫いのお振袖というまるで姫君と同じ格好をなさったものだ。あの頃はお側近くに中山局が必ず控え、あれこれと帝のお世話をやいた。手習いの相手も、御生母さまが自らなさったのだ。薄い闇の中で思いをこらすと、中山局の濃いお白粉のにおいが香ってくるような気さえする。その横には、墨を一心にする女官の室町清子、御乳人の梨木持子がいた。

当時の宮廷は幕府によつて、不如意な生活を強いられていたが、それだからこそ、少人数でびったり寄り添つて生きていくようなところがあった。儲君ちよくんと呼ばれた帝には、中山局以外に、たった四人しかお仕えする者がいなかったが、何の不自由もお感じにはならなかったものだ。

それが今ではどうだろう。内裏には数えきれないほどの女がひしめいている。もつとも帝のお目につくところにいる高等女官の数は限られているが、それでも大変な人数だ。帝は初めて御子を生んだ葉室光子の顔を思い出された。あれは明治六年のことだ。御誕生になった男の御子はその日にお亡くなりになった。二ヵ月後には橋本夏子が女の御子をおあげになったが、その方も同じで、内親王と称号がつかない間に薨去された。

光子、夏子と青春時代を共に過ごすしになられた女性にょしやうの顔を懐かしくおぼしめた時だ。帝の

中に不意にうかびあがつてきた女がいた。やわらかい頬と、黒目がちの細い目を持ったひとりの女官だ。

これはどうしたことだろうと、帝はいぶかしくお思いになる。彼女は光子や夏子と違い、純粋な女官であつた。一度も寵を賜つたことがない。出仕したのも、三十五年も前のことである。その女がどうして、帝の朝の思いの中に登場してくるのか。

臉を深く閉じて、お気持ちを集中される。するとひとつの情景がゆつくりと帝の記憶の底から立ち上がり、やがてかたちを整えた。

ああ、そうであつたと、帝は深呼吸なさる。あれは十日ほど前の紀元節宴会であつた。伊藤博文、田中光顯など高位高官が居並ぶ中、正四位の名士の彼女も臨席を許されていたのである。

赤紫色のびろうどの礼服に身をつつんで、いやがおうでも人々の視線を集めていた。そうでなくとも目立つ女なのだ。

退出なさる時、帝はほんの一瞬であつたが、最敬礼してお見送りする彼女に目をとめられた。立衿のチュールレースがあまりにもたつぷりした量で、その年齢の女にはそぐわないような気がされたのである。

あれが近頃流行のかたちなのだろうか。帝はふと、傍にいた女官にお聞きになりたいような思いにとらわれたが、もちろんおやめになった。

老いてくると、ささいな疑問や気にとめられたことが、心のどこかに巣くつてしまう。そして本人も気づかないうちに、意外な大きさとなり、何かの拍子にこぼれ落ちてくるものだ。彼女の

顔がうかんだのは、そのために違いない。

やっと原因をつきとめられた帝は、もう一度深い呼吸をなさった。

そしてこの小さな安堵が引き金となって、帝は再び眠りの中に入っけていかれた。

「おひるでございます」

祥子の声に、帝は頷かれる。絹羽二重の寝巻きの帝が半身を起こされると、それを合図に、祥子は「おひる」、帝がお目覚めになられたと声をあげる。

高倉寿子^{かずこ}女官長や柳原愛子といった典侍のところにそれは真先に告げられる。

「申しよー、おひるでござーと、申させ給う」

ご膳掛りは今度は、もう少し位が下の女官の方へ進む。

「申しよー、おひるでござーと」

身分の上下がすべてのお局^{つぼね}の中では、ふれ言葉ひとつにも歴然とした違いがあった。

侍医の拝診が終わると、祥子らの手によって帝は朝のみづくろいをおすませになる。

内裏の冬の朝は大層暗い。帝のおぼしめしで電氣を使われないからだ。何年か前に衆議院で漏電による火事があった。その際、もしも電燈をつけて、お側近くから火が出れば国民に申しわけがたたぬと帝はおっしゃり、人々は感涙にむせんものだ。

西洋蠟燭をつけたシャンデリアの下、帝は白羽二重のままおすすみになる。蠟燭をつけるのは夜と決められていたが、このような冬の早朝は、何かあかりがなければ朝食をとることもできな

い。

帝は毎朝牛乳入りの珈琲、バターとジャムを塗ったパンをお召し上がりになる。おからがご立派なわりには、そうたくさんはお口にいけないのが、女官たちには残念だった。

この時、愛犬の花と六が走ってきて、帝の膝に手をかける。時々はお飲みになる牛乳をねだつて、くうんくうんと鳴いたりもする。帝にこのような不法を働くのは、この者たちだけなのだが、帝は笑ってお許しになった。

この後、しばらく居間でくつろがれ、皇后の朝の挨拶をお受けになった後、いよいよ表御座所にお出ましになる。この時間も十時半と決められていた。

帝の厳格な御気性はお年とともにますます強くなつていかれるようで、このあいだも御寝所の襖を開けにくる女官の時間が、何分か狂つたと叱られたばかりだ。

第二艦隊司令長官にして海軍中将伊集院五郎は、御座所にて帝をお待ち申し上げていた。筑波と千歳の二艦が、アメリカ合衆国に招請され、バージニア州ハンプトン・ローズにおける万国陸海軍祝典に参列することになった。それを御報告するためである。

帝はこれをことのほか喜ばれ、伊集院に励ましのお言葉をかけたばかりでなく、二艦に対して酒肴料を賜わった。

感激した伊集院が退出した後、帝はしばらく新聞をご覧になる。報知や東京日日ばかりでなく、福岡日日など地方紙も入れて、それは三十種類にものぼった。新聞を拡げられると、インクの香りより、消毒のにおいの方が、まずつんとお鼻にくるが、帝はお気になさらない。帝がお手に触

れそんなものはすべて念入りに消毒されているので、このにおいては慣れていらつしやるのだ。

やがてお昼近くになった頃だ。帝は足にぶい疲れを感じになった。このところ御公務についておられる最中も、この足のたるさは何度もやつてくる。幼ない頃から寒中でも、りんとして動かないお躰けを受けた帝であるから、こういうことは大層齒がゆくも、情けなくも思われる。

あわててお伴申し上げようとする徳大寺実則侍従長を手で制して、帝は立ち上がられた。廊下をほんの五、六分軽く歩くだけでいいのだ。手を後ろに組み、窓から御所の庭を眺められたりする帝の後ろ姿には、あたりをはばかりようなご様子があつて、お側の者たちもこの時は自然と遠ざかるようにご配慮申し上げた。

御座所を右に出て、内謁見所に進もうとなさつた帝は、ふと氣が変わられてまっすぐにお歩きになった。廊下の片側は侍従の詰所や侍従の食堂が並んでいる。お若い頃は、ここにお気軽に姿を現わして、側近たちと酒を召し上がったこともある。

笑い声を突然お聞きになった。若々しいというより子どもじみたその声は実に遠慮がなく、宮中では最もはばかれるような類のものであつた。ふつう帝がいらつしやる時刻に、こんなふうにな作法なことはいらないものである。

お咎めになるつもりはなかつたが、帝はそこで足を止められた。

「下田歌子女史——」

とその声のひとつは言つた。

「ご乱行で——」

続く言葉も、宮廷には全くふさわしくないものであった。また笑い声が起こる。

帝はドアをお開けになった。

「どうしたのだ。そんなに笑って」

予想どおり、岡崎泰光、坊城俊良らが中にはいた。侍従職出仕のまだ十五、六の少年たちである。公卿の子弟である彼らは、ほんの子どもの時に仕出したので、多分にやんちゃなところが残っている。だが、突然帝がおでましになった驚きは彼らを完全にうちのめしたようで、すぐに答えすることもできず、かすかに震えているだけだ。

帝は岡崎の持つているものに目をとめられた。新聞ということはずぐにわかったが、ふだんお読みになっているものとは、活字の感じが違っている。なにかひどく粗雑な紙質だった。そのまゝうち捨てておこうとも思われたのだが、少年たちの発した言葉には、聞きずてならないものがあつた。

「下田歌子」「ご乱行」。少年たちは確かにそう言ったのだ。

「それを見せよ」

帝は言われた。手など出さなくともよい、帝がそうおっしゃったなら、それは絶対命令なのだ。
「これは……」

岡崎の声はかすれている。

「これは下品なもので、聖上お上がご覧になるようなものではございません」
「いいから、見せよ」

平民新聞とあった。帝はたいいていの新聞はご覧になっていたが、社会主義などという危険思想を唱えるこの種類のものに触れられるのは初めてだった。

恐懼して頭を下げる少年たちをそのままに、帝は御座所にお戻りになった。消毒のにおいが全くしないその新聞は、ところどころに目新しい単語が並んでいる。

その中でもひとときわ目をひいたのは、「妖婦下田歌子!!!」という文字であった。この名前を帝は感慨深くご覧になる。今日の明け方、あまりにも唐突にこの女のことを思い出した。それも何かの因縁だったのだろうか、目をおこらしになった。

妖婦下田歌子!!!

罪惡の下必ず女子ありとや、罪の子として冷酷なる人類に鞭たる者は嘗てはこれ天
使の如き者なりしよ、櫻花の如き美貌と熱火の如き感情に過られて虚榮の惡酒に酔ひ、
權勢の果實に狂し、其の十五年の年に於て初めて歡喜の生涯の幕を開いて得意と傲慢と
悲哀と恨愁の歴史を送つて、漸く秋風橋頭白髪を歎ずるの時來らんとする下田歌子よ、
彼女の一時に惱殺され、彼女の掌裡に翻弄せられたる者抑も幾人ぞ、彼女を傷けたる
色魔狂は曰く伊藤博文、井上馨、土方久元、山縣有朋、彼女が玩びたる情夫は曰く黒
田長成、秋山定輔、望月小太郎、田中光顯、林田龜太郎、三島通良、多情を經とし多
恨を緯とする者は彼女の歴史也、生涯也、吾人は今日の女學生が理想して措かざる下

田歌子を、一個の妖婦とし毒婦として爬羅剔抉し、彼女の満身をして完膚なからしめんとす只憾むらくは記者は爛錦を裁ち美花を摘むの伎倆を有せず、然れども只正直に大膽に彼女の面影を描き出して讀者をして戰慄せしめんとを期す

明・廿四日の紙上より連載

帝のそれまでのご生涯において、これほど下品な文章は目にされたことがなかった。もの珍しさから、繰り返し読まれたほどだ。こんなものを宮廷の御座所近くに持ち込むのではないと、岡崎らを叱り、自らの手で破り捨てさせようとも思われた。けれども、心にお残りになることがある。

そこに列記された重臣たちの名前だ。

伊藤博文と山縣有朋の名さえあるではないか。

帝の前にあがると、どれほどの高官、將軍も緊張のためにからだが震える。冬でもびつしりと汗をかく。けれども例外が四人だけいた。有栖川宮威仁親王と、この月の一日に学習院長となった乃木希典、そして伊藤博文と山縣有朋であった。有栖川宮親王を別にすると、伊藤、山縣は椅子に座ることを許されたたった二人の臣下である。

謹厳実直な人物で知られる乃木は、すすめられてもきつと辞退したであろうが、とにかくこの二人は、互いに椅子に座ったまま帝と言葉をかわせる寵臣なのである。そんな彼らが、このよう

にけがらわしい新聞に下田歌子と情を通じたと書かれている。

本当だろうか――。

お怒りよりも、純粹な好奇心が起こつたことに帝はご自分でも驚かれる。誰と誰が通じているなどという下世話な話は、帝がいちばん忌み嫌うものであつたし、それより何よりお耳に入れる者もない。だからこそ、一種新鮮なお気持ちがあわく。もしかすると、自分が知らないところで、なにか大きな世界が繰りひろげられているのではないか。いちばん低い世情というのは、こういうものをいうのであろうか。

しばらく迷われた末、帝は他の新聞の間にこの平民新聞をはさんで、内裏にお持ちになつたのである。

出御の時と同じように、入御の時間も十二時半ときっちり決められていた。軍服をフロックコートにお着替えになり、皇后さまとお昼食をお召し上がりになる。

「お天狗さん」と帝があだ名をつけられた皇后は、細くて高い鼻をしておられた。透きとおるような肌で、日本の貴族が持つ典型的な切れ長の目をもつておられる。典型的といつても、これほど完璧に美しいかたちを他の女たちはしていないので、さすが皇后さまと人々は感嘆する。

よく皇后は、お雛さまのようと形容されるが、雛は雛でも、男雛ではないかと帝はお思ひになる。女にしては太い眉がきりつとされ、性格はご立派でお強い。もしかすると、他の面もおありになるのかもしれないが、帝は女としての皇后に接しておられない。つまり御寝所を共にされていないのだ。

皇后は非常にきゃしゃな方でいらつしやる。手首など大人の親指をみつつ合わせたぐらいしかおありにならない。

一条忠香公が、お氣に入りの側室にお生まれになった皇后は、幼ない頃、滋賀の百姓のうちでお育ちになっていた。ご丈夫にお育て申し上げるためというのはいのいい言いわけで、あの頃の貴族はみんな貧しく、側室たちが生むたくさんの御子に、それほど金や手間はかけられなかったのだ。

しかし当時、富貴姫と申し上げた皇后は、ご利発なことは人々が驚くばかりで、一条公は手元にお置きになった後は、大層可愛がられ、自ら教育をお授けになった。このようにお小さい時にいろいろご苦労をされているので、皇后は人の気持ちをよく重んじられる。非のうちどころがないほど立派な女性なのであるが、帝は未だかつてこの皇后を女性として愛したことがない。

明治と年号が変わった年の暮れ、十九歳で入内した皇后を初めてお抱きになった時、帝はこれはいけないと思ひになった。まるで子どものような体つきの皇后は、男性を受け入れるようにはできていないのだ。それ以来、帝は皇后に触れてはいない。

御生母、中山局は帝におっしゃったことがある。

「他の女をお側にお召しになる時は、皇后さんのつらい気持ちも十分にお考えになるのですよ。それから相手の女性も、くれぐれも意向を重んじて、決して無理強いなさらないように」

帝は母君のこの教えを、最初のうちはかなり忠実にお守りになった。ところが、柳原愛子に対してはどうしてもと所望なさったのである。